

中島敦の作品研究

石 田 恭 子

目 次

はじめに

第一章 作者の生い立ち

第二章 『山月記』について

第一節 『人虎伝』との比較

第二節 李 徴

第三章 『李陵』について

第一節 李 陵

第二節 司馬遷

第三節 蘇 武

第四章 作品全体を通して

おわりに

はじめに

私が初めて中島敦の作品、或いは中島敦に出会ったのは、高校二年の『現代国語』の教科書の中である。作品は「李徴」を主人公とした『山月記』という短編小説であった。その当時、この作品に対

して、「短編ながら人間の内面を捉えた深みのある作品」という印象をもった。然し、漢詩が挿入され、文章も堅苦しく読みづらさも手伝って、あまり理解できないままになっていた。

この度卒業論文を書くにあたり題材を探し求めていた私は、改めて『山月記』と再会することになった。この作品を選んだ理由は、高校の時に感じた「深み」とは何か、また、それを感じさせるものは一体何であるかを追究するためである。同時に、敬遠しがちであった格調高い漢文調の文体に含まれている、中島敦独自の資質に、惹かれるものを感じたからである。

また、作者中島敦の不遇な生涯にも胸打たれるものがあつた。彼は、持病の喘息に苦しめられつつ、遂にその生命を奪われた。僅か三十三年と七カ月の生涯のうちで、真に作家として生きたのは死の直前の約半年であった。しかし、漢学に深い素養をもつ彼はその短い生涯で、中国古典に取材した『山月記』『弟子』『李陵』、英文学に取材した『光と風と夢』等の佳品を多く遺している。

私は敦の遺した作品を幅広く読み、作品の特徴、及び作者の内面を捉えていきたいのである。まず卒業論文では、特に、代表作『山月記』『李陵』を取り上げ、そこに描かれている人物を通して、作

者中島敦の人間観を究明していきたいと思う。同時に、私自身に持っていないものを発見するつもりで、研究してみたいと思っっている。

第一章 作者の生い立ち

中島敦は、明治四十二年（一九〇九）五月五日、東京市四谷区笹笥町（現東京都新宿区三栄町）五九番地に、父田人、母千代子の長男として生まれた。父は中学校、母は小学校の教員であったが翌年実母と生別している。数え年六歳の時に第二の母を、十六歳の時に第三の母を迎えたが、いずれの義母とも折合いが悪く、母性的なぬくもりに恵まれなかった。敦は、小学校入学まで、祖父母の下で育てられたが、祖父の中島撫山も伯父も漢学者であったため、家系に流れる漢学の素養を、幼少より受けていた。

大正四年、小学校入学に際し父の膝下に帰り、以後、父の転動に伴い奈良、浜松、京城の各地を転々とした。勉強熱心な敦は、各小学校で優等賞を授与されている。そして、大正十五年春、京城中学校四年修了と同時に、第一高等学校文科甲類に入学するが、翌年の昭和二年春、肋膜炎のため一年間の休学をしている。その間伊豆下田での療養生活の中の見聞を取材して『下田女の女』（昭和二年）、『ある生活』『喧嘩』（昭和三年）等の小説を書き、『校友会雑誌（313号）』に発表した。この頃から、宿痾となった喘息発作があらわれ始め、以後「彼の精神に暗い影をおとす」（『新修国語総覧』20頁）。昭和四年、文学部委員となり、『藤・竹・老人』『巡査の居る風景』等を『校友会雑誌（322号）』に発表した。同年、同じ文芸委

員の氷山英廣らと同人雑誌『しむぼしおん』を出したが、彼自身は作品を発表していない。「このようなところに『同人雑誌時代』ともいわれているこの時代に背を向けている中島の独自の姿勢が見てとれる」（『日本近代文学大事典』495頁）。五年四月、東京帝国大学文学部国文学科に進学し、翌年三月、橋本たかと結婚した。この年の秋、朝日新聞の入社試験を受けるが、第二次の身体検査で不合格となった。また在学中、永井荷風、谷崎潤一郎の作品や、『上田敏全集』、『鷗外全集』、『子規全集』等を読み、卒業論文には『耽美派の研究』を研究課題とする一方、父の縁故で私立横浜高等女学校に、国語と英語の教師として赴任した。翌九年、身体的条件により大学院を中退している。

また、この年、『中央公論』の懸賞に応募した『虎符』が選外佳作となった。以後、喘息をあやしながら、登山、旅行、音楽、草花づくり、短歌、ギリシャ語とラテン語の独学をしたり、パスカルの『パンセ』等の西洋文学や『莊子』『列子』『韓非子』等の中国文学を愛読するという私生活を送り、教職のかたわら小説も執筆した。十一年には、現実の教師生活に取材して「精神的私小説」（『日本近代文学大事典』496頁）とも言うべき『過去帳』『狼疾記』『かめれおん日記』の二編）を、十四年には「自己克服を目指して」（『現代日本文学講座』148頁）『悟浄歎異』を書き上げた。また十五年にR・L・ステイヴンスンの作品や伝記等を読み、翌十六年にかけてそれを基に『光と風と夢』を書き、続いて十六年春、出世作『山月記』を含む『古譚』を書き上げた。同年、喘息発作の為の転地療養を目的として、横浜高等女学校を休職（退職）し、六月、南洋庁教

科書編集書記としてパラオ島に赴任した。

しかしパラオでの生活が喘息に悪く、小説の執筆にも取り掛かれないうえ、南洋庁の教育方針への落胆もあって、帰心を募らせていた。翌十七年三月、南洋より内地出張のため八ヶ月ぶりに帰京した。肺炎にかかりそのまま在京、八月、南洋庁を辞任した。

一方、同年『文学界』二月号には、深田久弥の推挽による彼の作品『古譚』（『山月記』と『文字禍』）が掲載された。次いで五月、『文学界』に『光と風と夢』が掲載され、この作品は、十七年度上半期の芥川賞候補に挙げられている。ここで敦は作家として立つことを決意し、病苦と闘いながらも創作に専念し、『悟浄出世』『名人伝』『弟子』『李陵』等の傑作を次々に書き上げたが、同年十二月四日、喘息の為、僅か三十三歳でその生涯を閉じた。

第二章 『山月記』について

『山月記』は、『狐憑』『木乃伊』『文字禍』等と共に『古譚』と名付けられた作品群の一つである。昭和十六年四月頃執筆され、敦がパラオ島に出発する直前、深田久弥に託したものである。その後、深田氏の推挙によって昭和十七年『文学界』二月号に掲載され一躍文壇の注目を浴びたデビュー作品で、「今日に至るまで彼の作品中もっとも多く読まれているものである」（『日本の文学』253頁）。

第一節 『人虎伝』との比較

『山月記』は、李景亮の『人虎伝』に因って書かれている。この節では、素材となった『人虎伝』との相違点・相似点を挙げ、その比較を通して『山月記』の特徴を捉えていきたいと思う。以下の（ ）内の数字は、旺文社文庫『李陵・弟子・山月記』本文の頁数と行数を示したものである。

まず『人虎伝』『山月記』ともに、博学才穎の李徴が、発狂して虎になるという話であるが、『山月記』は、中国唐代の伝奇小説である『人虎伝』の李徴を詩人としてはめ込み、主人公として李徴の内面を柱として描かれている。この点が、素材となった『人虎伝』との最も大きな違いである。このように、主人公に「詩人」という要素をはめ込むこと自体、すでに創作であるが、詩人としての李徴を特徴づけ、強調するために、敦は様々な創作・改作を加えている。

この『人虎伝』から『山月記』への過程における変更を、濱川勝彦氏が取り上げられた六項目（『鑑賞日本文学』318頁）を借用して、私なりにまとめてみたいと思う。

(1) 李徴に詩人としての執念を与えたこと

『人虎伝』では「善く文を属す」（119・1）とあるのに対し、『山月記』では「詩家としての名を死後百年に遺そう」（111・4）とし、虎に変身してからも「産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部たりとも後代に伝えないでは死んでも死にきれないのだ」（111・3〜4）という言葉を吐く等、詩人としての凄まじいまでの執念が加えられている。

(2) 李徴の性格と周辺の人物の変更

『人虎伝』の李徴は、高貴な生まれであり、その生まれによるところのわがままな性格が見られるが、『山月記』の李徴は、「臆病な自尊心」(119・2)と「尊大な羞恥心」(119・2)をもつ性格とされている。それは、袁修に「温和」(113・3)という性格を与えていることよって強調されており、この「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」とをもつが故に生じる孤立的で孤独な様子が表現されている。また、「己の中の人間の心」(116・11)が消えてしまうことを「恐ろしく、哀しく、せつなく」(116・13)思うといっているように、人間の心の喪失への不安、苦悩する人間の姿が見られる。

(3) 李徴の心理描写の詳細化

前に述べたように、この『山月記』は、李徴の内面を中心として書かれており、殆どが李徴の告白によつて成り立っている文章であるため、その心理は敦の創意によつて細かく描かれている。これに関連して、袁修との会話の文体は、『人虎伝』では、袁修は「惨曰く」、李徴は「虎曰く」というようにそれぞれすべて直接話法であるのに対して、殆どが李徴の告白である『山月記』では、袁修の言葉を簡略にして殆ど地の文としているため、「李徴の独自の要素が顯著である」(『鑑賞と研究・現代日本文学講座』150頁)。従つて『山月記』における直接話法は僅か三箇所、そのうち李徴の会話は「人間の声」「低い声」というように、いずれも「声」が主体となっている。これは、人間の言葉を話す虎との対話ではなく、自分の内面を訴える手段として「声」を発するといふ、「心」の存在を表現するための技巧ではないかと思ふ。

(4) 袁修への依頼の順序変更

『人虎伝』では、最初に妻子のことを頼み、その後自己の詩業伝録を依頼しているが、『山月記』ではこの逆で、先ず自己の詩業伝録を依頼している。ここでも詩家への執念を強調すると共に、自己中心的で、人間性が欠如していることを表現している。

(5) 変身の原因

『人虎伝』では、虎と化した原因が「南陽の郊外に於てかつて一孀婦に私す。其家竊に之を知り、常に我を害せんと心の心あり。孀婦是れより再び合うを得ず。吾れ因つて風に乗じて火を縦ち、一家数人尽く之を焚殺して去る。此を恨となすのみと。」(183・12~14)という「行いの神祇に負ける」(181・13)ものであるが、『山月記』では、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」(119・2)を主とする「人間の在り方や心の問題」(『鑑賞日本文学』318頁)にその原因がある。これと同様に、『人虎伝』では「汝墳の逆旅の中に於て忽ち疾を被りて発狂し、僕者を鞭捶つ。」(179・10)とあるように「疾」によるものである発狂も、『山月記』では、このような李徴の性格、及び、精神的なものが因をなしている。

(6) 後日譚の削除

『人虎伝』では、袁修や李徴の子についての後日譚が書かれているが、『山月記』ではカットされている。虎の慟哭で終わらせることにより、かえつて作品に余韻余情を残し、「悲劇的世界を効果的に完結」(『鑑賞日本文学』318頁)させている。

この他にも、李徴の内面にポイントを絞るため、『人虎伝』にある虎が婦人を喰つたといふこと等を、『山月記』では削除したり、

整理、或るいは、前述の様に創意を加えている。また、「後で考えれば不思議だったが、その時、哀愴は、この超自然の怪異を、実に素直に受け入れて、少しも怪しもうとしなかった。」(113・12～13)という一文の補助によって、伝奇的要素より李徴の内面をポイントとする『山月記』への創作、改作に成功している。そして、この創作、改作部分において、詩人としての李徴の内面を見る一方、中島敦の内面的なものを見ることが出来る。この事は、「単なる伝奇・怪談にとどまっている』『人虎伝』に「その素材の框はそのまま借用しながらも、中島はそれを自分自身のものとなし切って、その中に詩人存在の悲しさ、芸術に囚われたものの狂気という、今まで描かれるべくして描かれ得なかった芸術家自身による芸術家の心情の告白という芸術上の大きな課題が、渾然たる作品に見事に解明されている。」(『近代文学鑑賞講座』31～32頁)と、福永武彦氏が評されていることから裏づけることができると思う。

第二節 李 徴

次に、主人公李徴の内面を具体的に捉え、そこから作者中島敦の内面(例えば人間観等)を捉えてみたいと思う。

まず、冒頭部分から李徴の性格を見ていくと、「隴西の李徴は博學才類(中略)性、狷介、自ら待むところすこぶる厚く(中略)

人と交わりを絶ってひたすら詩作に耽った。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである」(111・1～4)とある。ここから、自己の才能

を誇示する自負心もち、非社交的、非協調的で自己中心的、また自尊心が高く、詩人として名を遺そうとする詩家への執念に伴う自己顕示欲、名誉欲の強い性格が見てとれる。李徴が後に虎と化したのは、このような性格が因をなしている。

李徴自身は、虎と化したことを「理由もわからずに押し付けられたものをおとなしく受け取って、理由もわからずに生きて行くのが我々生きもののさだめだ」(114・11～12)というように運命的なものとして捉え、その生きものの運命に堪えきれない、即ち、人間存在の絶望により「自分はすぐに死を想う」(114・12)のである。また、「産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えたいでは、死んでも死にきれない」(117・3～4)詩家への執念に捕われた自己を、後には「嗤ってくれ。詩人に成りそこなって虎になった哀れな男を。」(117・13)と自らを嘲けり、その気持ちに次のような詩に詠じている。

偶因狂疾成殊類 災患相仍不可逃

今日爪牙誰敢敵 当时声跡共相高

我為異物蓬茅下 君已乘軺氣勢豪

此夕溪山对明月 不成長嘯但成呻

(118・2～5)

しかし、ここでは虎となった理由を未だ運命的なものとして捉えており、自分が人間であった昔を顧みながら、虎となったため詩を世に発表することができなくなった現在の自分の身の上を、出世した哀愴と比較して嘆いているのみであり、自分の内面の欠点を反省するには至っていない。人間性の欠如は、「なるほど、作者の素質

が第一流に属するものである」(117・8)と思ひながら、「第一流の作品となるにはどこか(非常に微妙な点において)欠けるところがある」(117・9)と袁蓼が評するような、人間愛を欠いた血の通っていない作品を書いていることや、妻子のことよりも、先に詩の伝録を依頼しているところにも見る事ができる。しかし、後には、自分の「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」が他人に理解されないことを嘆きながらも、「本当は、まず、このことのほうを先にお願ひすべきだったのだ、己が人間であったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業のほうを氣にかけているような男だから、こんな獸に身を墮すのだ。」(121・2、4)というように、虎となった原因を自分の心の内に見つけ、内面と外形の表裏一体に氣付いている。そして、一人の人間である前に一人の詩人であった、詩家に執着した自己中心的で人間愛を喪失していた自己への反省に至っている。そこには、人類愛に目覺め、人間性を回復した李徴が見られる。

次に、この作品のポイントであり、主人公李徴が虎と化した原因の根本でもある李徴の「臆病な自尊心」と、「尊大な羞恥心」について考えてみたいと思う。

冒頭の部分で李徴の性格を捉えた時、「自尊心が高い」という点があった。即ち、「尊大な自尊心」として冒頭部分では捉えていたが、李徴自身が語る「自尊心」は、羞恥からくる「臆病な自尊心」なのである。この「臆病な自尊心」とは、「人中に入ることをひどく恥づかしがるくせに自らを高しとする点では決して人後に落ちない」(『中島敦』19頁)というように、自尊心を傷つけられることを

極度に恐れることであり、一方の「尊大な羞恥心」とは、羞恥心が強い為、羞恥心を抱く機会に近づこうとしない尊大な態度である。そこで「尊大な羞恥心」が、人間との疎遠を生じさせ、「臆病な自尊心」を飼いふとらせ、人間性を喪失させ、遂には虎と化すに至らしめたと言ふことができる。また逆に、「臆病な自尊心」が根源的要因となつて、虎と化するに至らしめたとも言ふことができる。即ち、「自尊心」と「羞恥心」とは相対する性質であつて、「臆病な自尊心」イコール「尊大な羞恥心」なのである。

また、「少年期の中島と併せ見れば、日常の中島が、きわめて快活な、豊かなユーモアと尽きない話柄の持ち主であつたことがわかる。にもかかわらず(仕事)を前にした時だけは、がらりとその態度が変わつて、引つ込み思案な厭人癖に深く沈みこんでしまふ。これはまさに「性癖」であり「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」の跳梁なのではないか」(『中島敦』22頁)と、佐々木充氏が述べられているように、この李徴の「性癖」はそのまま作者中島敦の「性癖」にあてはまると思う。そして、そこに「臆病」と「自尊心」と、常識では決して結び合わないはずの語が結び合っている(中略)この内部矛盾とその統一」(『中島敦』20頁)を、自己への課題とする教を見ることが出来る。そして、その陰には、喘息という肉体的な病みと、時代における精神的な病み即ち(近代の憂愁)『中島敦』23頁)に苦しんでいる作者が潜んでいるように思われる。とするならば、「虎は、すでに白く光を失つた月を仰いで二声三声咆哮したかと思つと、また、もとの叢に躍り入つてふたたびその姿を見なかつた。」(121・13、14)という最後の部分での虎の咆哮は、人間存在へ

の別れを告げる李徴の慟哭であると同時に、敦自身の（人生の歎き）（人生の悲しみ）（現代文学講座）24頁）を表すものであると思う。同時にこの「咆哮」は、「この胸をやく悲しみを誰かに訴えたいのだ」（120・3）、「誰一人己の気持ちをおわかってくれる者はない」（120・6）の部分に呼応するものでもあると思う。即ち、自分を誰かに理解してもらいたいという切実な訴えと、誰にも自分の心は理解してもらえない悲しみ、嘆き、そして孤独感—言葉で言い表されない状態まで行き詰まったもの—が、虎となった李徴の「咆哮」となり、敦の「咆哮」となったのだと私は思う。

以上見てきたように、『山月記』は、「近代人の絶望的な自意識を分析するとともに、人間存在の不条理を追求して、芸術家としての苦悩を表現した作品」（『新修国語総覧』201頁）とあるように、詩人の自意識について表面上は書かれているが、これは詩人のみならず、人間として存在するための問題を多く含んでいる。例えば、ここでテーマとなった「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」については、「自尊心」や「羞恥心」というものは、詩人李徴に限らず人間誰もが多少なれ少なかれ持っている。この「自尊心」と「羞恥心」が共に強すぎる李徴を見ながら、同時に、これが全くないという逆のことも考え、そこに人間としての在り方を見い出させようとしているのだと思う。このような人間の内面を深く掘り下げた所にある複雑なものが、漢文脈の文章によってひしひしと伝わってくる。

第三章 『李陵』について

遺作となった『李陵』は、彼の死の翌年、昭和十八年の『文学界』七月号に載った。この作品により中島敦の評価はゆるぎのないものとなった。『漢書』等の記述を素材として、李陵・司馬遷・蘇武それぞれに人格を与え、そこに関係をもたせて書かれた「もつとも絵画的な小説」（『日本現代文学全集』184頁）である。

この作品は、李陵・司馬遷・蘇武ら三人それぞれの生きる道、あるいは己を生かす道、その選択、及び、それに伴う運命について書かれていると思う。そこで、佐々木充氏の「李陵、司馬遷、蘇武、彼らの生は、それぞれに戦いの生である。武帝という姿に化身した（あるもの）への抵抗の生であり、自己との戦いの生である。」、（『中島敦』55頁）と説かれている「戦いの生」、それぞれの立場における「戦いの生」、生きる道を見ていくと共に、それを選ぶに及んだ要因ともなる性格や立場や人生観の違いを見ていきたい。

第一節 李 陵

騎都尉・李陵は飛將軍と呼ばれた名将李広の孫である。彼は、「確かに無理とは思われたが、輜重の役などに当てられるよりは、むしろ己のために身命を惜しまぬ部下五千とともに危きを買すほうを選びたかったのである。臣願わくは少をもつて衆を撃たん」（9・9～11）と述べている。この言葉及び選択から、勇敢で精神な氣質が見られるし、また、部下からの信頼も厚いことがわかる。この

第二節 司馬遷

李陵は、僅か五千人の歩兵を率いて匈奴の大軍を相手に勇敢に奮闘するが、結局は全滅し、匈奴に捕えられた。この時、彼は「自ら首刳ねて辱しめを免れるか、それとも今一応は敵に従っておいてそのうちに機を見て脱走するか」(38・3・4)という二つの途のうち後者を選んだ。それは、義理立てや名譽を保つに留める死よりも、敗軍の責任とそれを償う手柄を立てることを目的とした生への選択であり、国への責任を果たそうとする、騎都尉としての生きる道だったのである。

しかし、匈奴の単于や左賢王等の人間的な手厚い待遇により匈奴から逃げ出す機を失い、匈奴の生活に甘んじていた。それは結果的には祖国及び武帝に背いたことになり、陵の家族や親族は皆殺しとなった。その為、陵は祖国である漢に対して憤怒を覚え、再び漢に帰ることを断念する。しかし、匈奴に捕えられた時に死を選択しようとし、後どんなに飢えようとも匈奴へ降服しないという強い意地をもっている友人の蘇武に会う。その蘇武の生き方と、自分の生き方を対比させ、己の愛国心の欠如、及び、それに伴う人生観において蘇武への劣等感を抱き、深く傷付き、苦悩する。その後、漢から迎えが来るが、祖国を捨てた李陵は、最早それに従うことはできず、異国匈奴の地でその生涯を閉じるのである。

つまり李陵は、「考える限りみずからにふさわしい行為の仕方を選びとりながら、一つ一つの外界の動きに裏切られつぶされ」(『現代文学講座』36頁)ているため、人間としての悲壮さが感じられる。その中で最大の悲劇は、自らの選択により、家族及び祖国を失ってしまったことである。

司馬遷は、死期の直前太史令を務めていた司馬談の子である。司馬遷は、父司馬談の死の前に、太史令の職を継ぎ、史記を編纂しようとする父の意志を継ぐことを誓い、四十二歳の時から史記の編纂着手した。

この史記の編纂に当たり、司馬遷は、「作ル」ことを極度に警戒した。自分の仕事は「述ベル」ことに尽きる」(30・1)としている。これは同時に、中国古典等を素材として小説を書く敦の執筆態度でもある。そして、素材となる作品から人物を抜き出し、それだけの人物がもっている本来の人格を与えて、自分の作品の中で、それぞれ人格をもった人間として復活させることの困難を示しているのであると思う。

司馬遷は、李陵を弁護したため、刑罰を受けるはめとなる。司馬遷が李陵のために弁護し、罪を獲たことに対し、李陵は「別にありがたいとも気の毒だとも思わなかった。司馬遷とは互いに顔は知っているし挨拶をしたことはあっても特に交りをつ結んだというほどの間柄ではなかった。むしろ、いやに議論ばかりしてうるさい奴だぐらいにしか感じていなかったのである。」(46・8・11)と述べている。このように、別にさして親しくもない李陵のことをどうして弁護したのかということについて考えてみたいと思う。それは、次のような状況によるものだと思う。

匈奴で捕虜となり、己を欺いた李陵に対し、武帝は激怒し、「妻子眷属家財等の処分」(23・7)を決定した時、帝の怒りを恐れて

李陵のことを弁護する者はいなかった。そればかりか、自分の身を守るために李陵を譏誣している。司馬遷は、このように状況の変化に応じて態度を変える要領のよい人間を「全軀保妻子の臣」(25・6)と批難し、朝廷で下問を受けた時、はつきりと李陵をほめあげた。この行為は、結果としては李陵や李陵の家族等を救うことができなればかりか、自分自身をも不幸に落とし入れる空しく悲しいものとなったが、こびへつらうことに甘んじず、曲つた事を嫌い、正直に生きようとする彼の性格、態度をそこに見ることがができる。

李陵弁護による刑は、死刑か宮刑かのいづれかである。そこで司馬遷は、父から依託された史記執筆という史業を成し遂げるため、死刑を拒み、死よりも辛く苦しい宮刑を選択した。その宮刑の精神的な苦しみは、次に示す通りである。「西欧ルネッサンス時代のよりに肉体の美が価値をもった漢代に生まれて、宮刑の憂き目にあつた司馬遷は、まえに述べた古代宗教の復活儀礼に淵源する肉体の不具を恐れる観念と並んで、自己の欠損した肉体にたいする醜悪感とが加わって、司馬遷は二重三重の劣等感にさいなまれることになった。宮刑を受けた人間は、単に醜いだけでなく人間悪そのものだと彼は意識した。」(『史記』「中国古代の人びと」43～44頁)とあるように、かなり辛い恥辱であった。しかし、敢えてこの宮刑を選択してまで生を保とうとしたのは、父の遺囑を果たそうとする強い意志と責任感、そこから生じる史記編纂への執念ばかりによるものではない。修史という仕事は、彼にとって「いかにかいとわしくとも最後までその関係を絶つことの許されない人間同志のような宿命的な因縁に近いもの」(36・8～9)であり、後には「生きることの喜び

を失いつくした後もなお表現することの喜びだけは生きるものだ」(37・10～11)と、感じさせるまでのものとなっている。そして「悲劇的な行為を自ら選択することによって自己の実存を肯定へと転換せしめることができた」(『現代日本文学講座』100頁)。即ち、世間的なプライドを守ることもよりも、史記編纂を自分の生きる道としている。これは、司馬遷が真の文学者であった故にとつた道なのだと思う。この道は同時に敦の生きる道でもあり、作家として生きる敦の決意と重なるものだと思う。彼は、生い立ちにおいても、人生観においても共通するところのある司馬遷の生き方に、自己を託しているように思われる。

第三節 蘇 武

蘇武は平和の使節として遣わされたが、匈奴の内紛に巻き込まれて、捕えられた。この時、蘇武のとつた態度は「ただ蘇武一人は降服を肯んじえないばかりか、辱しめを避けようと自ら剣を取って己が胸を貫いた。」(48・9～10)のである。ここに、生よりも、我及び我が故国が辱めを受けることを避けるために死を選択する硬骨の士、蘇武の生き方を見ることが出来る。また、幸か不幸か生き延びた蘇武は、「餌につられるのはもとより、苦難に堪え得ずして自ら殺すこともまた単手に負けることになる」(52・15～16)として、「想像を絶した困苦、欠乏、酷寒、孤独に堪え」(53・2)、匈奴に降服しない。このような蘇武の意地は、故国への純粹な愛国心によるものなのである。それは、武帝の崩御を耳にした蘇武が「南に向

って号哭した。慟哭数日、ついに血を嘔くに至った」(55・12〜13)という様子からも捉えることができる。この蘇武の愛国心が、故國を捨てた李陵を圧倒して、彼を苦惱に追いやったのである。

以上、李陵・司馬遷・蘇武三人の生き方を見てきたが、その人生はそれぞれの「運命」というものに大きく左右され、引きずられていくような印象を受ける。運命とは、人間の力ではどうすることもできないものであるが、一つの運命を導く要因は、その運命に引きずられている人間自身の内にある。このことは、三人それぞれの選択についても、また、前に述べた『山月記』の李徴についても共通して言えることだと思ふ。

第四章 作品全体を通して

ここでは、中島敦の代表作品をいくつか挙げ、その作品ごとの特徴を見ていくと共に、作品全体の特徴をまとめていきたいと思う。

『斗南先生』

この作品は、伯父の死の前後を書いた実録に基づくものである。ここで、敦は、三造という青年として登場している。三造は、この伯父に似ていると言われているため、自己と類似した精神的な要素をもつ伯父に対して反発や嫌悪を感じている。即ち、それは、敦が伯父の中に自分を見出し出していることを示し、そこに自己の存在を追究している青年敦の態度を見ることが出来る。

『光と風と夢』

この作品は、敦の唯一の長編小説であり、芥川賞候補に挙げられた作品である。彼が興味をもっていたスティヴンスンの作品や伝記に基づいて書かれたものであるが、敦の想像力を多分に加えた創作的な作品である。敦は、サモア島に渡って嗜血と闘いながら執筆するスティヴンスンに、喘息に苦しめられつつ執筆する自己との共通性を見出し出して、スティヴンスンと自分を重ね合わせて書いている。そのため、敦自身の「自己告白」(『日本の文学』「滝井孝作・梶井基次郎・中島敦」520頁)という主観的な立場で、作家の自意識が述べられている。

『名人伝』

この作品は、『列子』『莊子』にある話を敦が一つにまとめ、彼の創造により再構成したものである。弓の名人紀昌が、弓の道に専念してその道を極めた、即ち、弓の道の到達点に至った状態を描いている。それは、「詩人の自意識をめぐって、いろいろな姿を借りて追及されたものがこの『名人伝』ですっかり昇華されて、その彼岸につきぬけたように爽やかである。」(『李陵・弟子・山月記』168頁)と述べているように、執筆者としての疑問や迷いを脱した敦の精神の状態を示しているものであると思う。

『弟子』

この作品は、『孔子家語』『論語』『史記』『春秋左氏伝』『莊子』『説苑』『礼記』『詩経』等を素材として書かれているが、ここにも敦の創作が見られる。それ故、孔子・子路・子貢等の実在感を感じることが出来るのであろう。師である孔子への「純粋な敬愛の情」をもつ「浪漫主義者、理想主義者」(『李陵・弟子・山月記』

165頁)である子路と、その運命を描いた作品であり、それはまた、「ひたむきな純粹性に殉ずる者のひとつのヴァリエーション」(李陵・弟子・山月記)なのである。

これらの作品に、前述の『山月記』『李陵』を加えてその特徴を見てみると、いずれも作品の根底に、己をみつめる作者の目が潜んでいるように思える。そして常に、人間の在り方、即ち、人間存在の疑惑と闘う教を、作品の背後に見ることができる。作品は全体的に人間、在り方・自己の在り方を追究している。『斗南先生』『虎狩』或るいは『過去帳』と呼ばれる『かめれおん日記』『狼疾記』等々では、教自身の日常生活に取材して作品を執筆しているため、教の「己を見つめる目」は、わりに露骨に述べられている。しかしそれ以後の作品は、中国古典や西洋の小説等から、自分と相似した人物を見つけ出し、その人物に自分の内面的なものを託して創作し改作しているものが多い。それは特に、作家として立つことを決心した後の作品であるため、作家として自己の存在の追究である場合が多い。しかし、表面上は「作家の自意識」や「作家としての苦悩」を描いているように見えるが、その根底には、人間誰しもに共通する「人間としての在り方」の追究になっていると思う。

おわりに

私は、中島敦の作品を色々と読んでみたが、敦の日常生活を素材にして理屈っぽくかつ露骨に彼自身の考え(例えば人間観や人生観等)を綴った作品よりも、歴史小説や伝奇小説の主人公の中に彼の

考えを潜ませているような作品の方が興味深く、より魅力的で素晴らしいと思った。

最初はこの卒業論文を手掛けようとした時、歴史小説や伝奇小説のような作品から、作者中島敦を考察することは困難だと思った。ところが、例えば『李陵』のような歴史小説を読む時、その素材となった『漢書』や『史記』と読み比べてみると、敦が、かなり登場人物に彼なりの感情等を吹き込ませ手を加えていることに気が付いた。それは、『山月記』等のような伝奇小説においても同様である。登場人物の口や心を借りて敦は自分の考えを述べているため、登場人物(特に主人公)の中に中島敦の人間観・人生観・人格等を理解することができた。即ち、敦は、歴史上の英雄たちの中に自己を見出し、自己と重ねて感情を与え、生命を吹き込んで、史、実、上の一英雄を彼独自の手によつて敦風に生き還らせているのである。それは、敦の想像力の豊かさ、人間に対する知的理解力の豊かさによるものだと思う。私は中島敦の作品を通して、史、実、上の一英雄を超えた一人の人間として捉え、その人物の人生・生き方を物語的に、ドラマチックに理解することができた。私もこれを機に、史、実、上の記録に限らず色々な人物の伝記或るいは小説を通して、さまざまな生き方を見ていき、敦のように、そこに自分を見出し、自分の生き方を考えていきたいと思った。そのためには、敦のように多くの本を読み、心を広げながら、登場人物の人格や心情を推測できる、人間に対する知的理解力を養っていきたいと思う。

また、敦が、自己の内部に矛先を向け、人間としての在り方及び自己自身の在り方を追究して、人間の真実の「幸せ」についての究

明に努力している態度にも深く感銘した。

今回の卒業論文は、あまりにも文献に頼り過ぎてしまった。今後とも折をつくって、じっくりと教の作品を読み直してみたいと思う。その都度、彼の作品は、必ず新しい力を与えてくれるであろうというのを私は確信している。

参考文献

- 『作者の肖像』 吉田健一・読売選書・昭54
『鑑賞と研究・現代日本文学講座』・三省堂・昭37
『日本近代文学大事典』・講談社・昭52
『鑑賞日本文学』④「梶井基次郎・中島敦」 濱川勝彦・角川書店・昭57
『中島敦』 佐々木充・桜楓社・昭46
『近代文学鑑賞講座』・「中島敦・梶井基次郎」 福永武彦・角川書店・昭45
『日本現代文学全集』・梶井基次郎・田畑修一・中島敦』・講談社・昭39
『中島敦の研究』 濱川勝彦・明治書院・昭51
『日本の文学』・「滝井孝作・梶井基次郎・中島敦」・中央公論社・昭47
『昭和文学全集』・「中島敦・武田泰淳・田宮虎彦集」・角川書店・昭29
『研究資料現代日本文学』・明治書院・昭55
『史記を語る』 宮崎市定・岩波書店・昭54
『史記』・「中国古代の人びと」 貝塚茂樹・中央公論社・昭52
『英雄ありて』 陳舜臣・講談社・昭58

『李陵・弟子・山月記』 中島敦・旺文社

『現代文学講座』・「昭和の文学」・至文堂

『現代の視点・中国の群像 張騫・李陵』・旺文社・昭60

『中国古典文学大系』・「漢書・後漢書・三国志列伝選」・平凡社・昭58

『新修国語総覧』・京都書房・昭56

『史記列伝(例)』・岩波書店・昭60

『史記列伝(国)』・岩波書店・昭60

〔評〕

石田さんと中島敦との出会いは、高校二年の「現代国語」の教材『山月記』であった。その時、短篇ながら人間の内面を捉えた深みのある作品という強い印象が、ためらいもなく卒業論文のテーマに敦の作品を選ばせたのである。

最初私は石田さんからその指導の依頼を受けた時、適任でないことを述べて一応断ったが、話し合ったうえで相談に応じることになった。従ってこの卒業論文は、彼女の篤学研究精進の成果である。

中島敦の人間形成・人間観・人生観を理解するために、石田さんは納得のゆくまで作品群を読み、多くの参考資料や文献にあたっている。その研究態度は、努力と誠実そのもので第二章第一節などはそのよき証しである。概してやや参考資料に拠り過ぎたかに思われるが、それも石田らしい正直さである。また、漢文学にも関心を持っていたことも幸いしている。特に「おわりに」の一節は石田さんの真剣な研究態度の真情として説得力がある。好論文としてその労を称揚したい。

(野崎アサエ)